

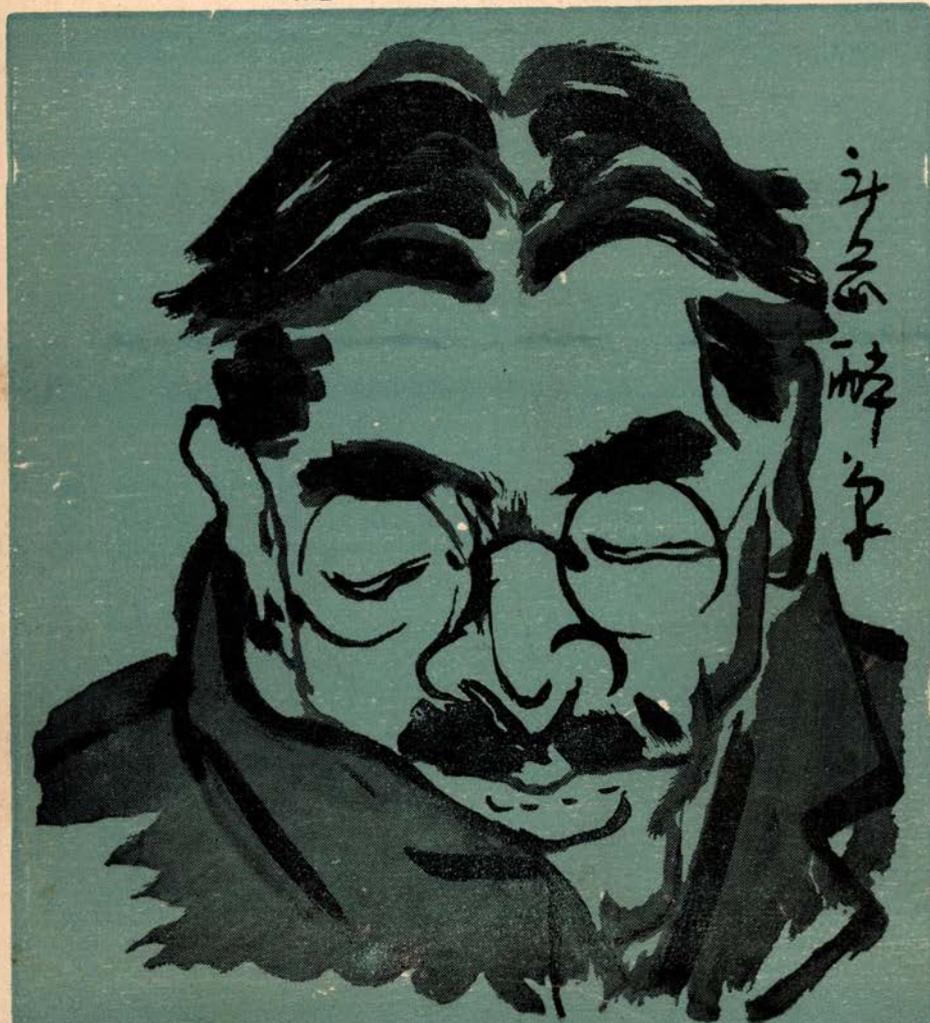
郎路生麻・幹主

川柳新誌

號 月 三

大正十五年三月三日第三種郵便物認可
昭和二年三月一日發行(每月一日發行)

川柳雜誌 第四卷第參號



川柳雜誌社發行

◆本社三月例会

◇日時 三月五日午後六時半
 ◇場所 大阪市南區清水町停留所
 ◇兼題 「日向」端の坊
 ◇會費 貳拾錢
 初心者の來會を歓迎す

◆遅日莊柳談會

拙宅に病人續出のため三月の柳談會は、開催不可能・思ひますので休會することにいたしました。(路耶)

◆各地支部増設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を増設いたします。柳壇のために且つ又川柳雜誌「のために眞面目に支部幹事を引受け、極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申し込んで下さい。

◆新選者推薦

左記の三氏に新に本誌の選者々依頼することにした。同氏等の柳壇に於ける地位はあらためて喋々するを要しないのでせう。

- 金澤 小西兎絲子氏
 大連 佐々木三福氏
 同 中野柳陽氏

川柳雜誌 第四卷第參號目次

感想・評論

金子元臣氏の「川柳點」
 二度目の元旦と
 二二三のこと
 所謂穿ちを排すべし
 短詩時代來たる

研究・其他

柳壇廿四篇まで(二)
 評柳 短解
 自個標準の句三
 鮎のそろばん
 江戸生れの句に就て
 雪の國から
 琴柱 さは
 柳談會漫録
 三人の名人

◇募集句

支配人
 火鉢
 下宿
 本社二月例会
 各地柳壇

川柳家戸籍調
 路郎醉後(表紙畫)
 題字
 編輯後記
 馬行生
 清水對岳坊
 小出檜重
 松耶生

創作

喜田飯山
 榎山千代二
 高見柳骨
 塚崎松郎
 矢田右大臣
 松本助六
 岩崎柳路
 酒井駒人
 安井ひろし
 林田馬行
 庄萬よし
 橋本二柳子
 木村半文錢
 蛭子省二
 安川久流美
 諸家
 川柳塔



金子元臣氏の「川柳點」

「女子國文新編」中の一章

麻 生 路 郎

川柳を正しく解し、正しく鑑賞してくれる人々の量が、地上を匍ふて塗みこむ水のやうにひろがつてゆくことは嬉しさの極みであるが、それ反對に、社會的に大きな宣傳力をもつてゐる人々即ち文士や學者や新聞記者によつて誤つた川柳觀が、書きなぐられたり、無駄話式に談されたりすることは、實に苦々しいことでもあり、又悲しむべきことでもある。殊に教科書の如き偉大な普及性を把持するものによつて誤られた句評や誤られた川柳觀が、擴がるがまゝにまかせてあるといふことは到底黙視することが出来ない。同時に所謂川柳家の微力さを思はずにはゐられない。川柳家はよろしくそれ等の誤りを正して、筆者及編纂者がそれ等の教科書の再版に際し改訂するの資となさなければならぬ。

東京高師教授垣内松三氏の編纂にかゝる女子國文新編の第八卷第一〇頁に「川柳點」といふ一章が掲げられてある。筆者は

國學院大學の講師金子元臣氏であるが、その定義するところによつても知られるやうに、從來の學者が文學史又は文學論などに叙したる川柳觀よりも、より正確であり、より以上に理解ある筆致を見せてゐられるのは甚だ愉快であるが、その句釋及び句の選み方を觀るに、川柳に狂句を混同すること、世の常の學者を軌を同じうしてゐられることは甚だ遺憾である。いさゝか其の點について書いて見たい。

先づ同氏が川柳に下したる定義を拔萃して、その川柳觀をうかがふこととする。

「川柳點は實に剃刀の如きか。觸るゝもの皆斷れ、近づくもの皆傷つく。語句簡勁にして直ちに人の肺腑に入り、諷刺骨に徹り、滑稽頰を解き、或は痛快に、或は輕妙に、或は突梯に或は奇怪に、干變動化、人をして應接に遑あらざらしむ。時に輕薄にして鄙俚なる調なきにしもあらねど、要するに寸にして珍なるものなり」

この定義によつて觀るに、同氏の古川柳觀は非常に公平無

私なものであり、從來の文學書に於いてすら、翻るここの出来
ない正體さを持つてゐることに敬意を表せずにはゐられない。
が、しかし、同氏が評釋をこころみられた全部の句を抜いて
檢するに、次の十七句であつて、玉石同架であること、川柳さ
狂句さを混同して取扱つてゐられることは指摘しない譯には
ゆかぬ。

あがるなさいはぬばかりの帳を出し
竹の子は盗まれてから番がつき
おさへれば薄はなせばきりぎりす
本降になつて出でゆく雨やぎり
提灯が消へて座頭は手を引かれ
片假名に四角な文字は手を引かれ
手紙には狸臺には鯉を載せ
名物を食ふが無筆の旅日記
泣くもよい方を取る形見わけ
戸隠も神樂のあひだ髭をぬき
御紀行拜見に能因は當惑し
忠盛の高名の塲を犬がなめ
その暗さ隼太櫻に衝きあたり
時致は鞭をかじつて息をつぎ
佐野の馬戸塚の坂で二度あがり
芭蕉は飛びこみ道風は飛びあがり
釣れますかなぎ文王そばに寄り

(一)の「あがるなさい」の句は古川柳畑の穿ちの句である。金子
子氏の解「無筆者、年賀に来て、御慶帳の記名に困り「さらば來
ぬ分にして下され」と云ひしこと、昔の笑話に見えたり。今は帳の
代りに名刺受を支關に出す。これもあがるなさいはぬばかりなり」
は要を得てゐる。(二)の竹の子の句も又穿ちの句。その解に

よくあることなり。後の祭にもあれ、何にもあれ、番を附くるは、附け
ざるに勝れり。聞きやうによりては諷刺さもなり、訓誡さもなる
こと。(三)の「おさへれば」の句は寫牛體の句である。同じスケ
ツチでも俳句は行き方が違ふ點に留意しなければ川柳の寫生
體には一沫穿ち味が匂ふてゐることである。左記十七句中の白
眉であらう。(四)の「本降に」の句も又寫牛體の句であり、輕
い穿ち句である。この句、柳樽の初篇では「本降りになつて出
てゆく雨やぎり」になつてゐる「出でゆく」の文章體よりも、
「出でゆく」の俗語體の方が調子の方から云つても、句全體の
ましまりの上からいつても自然である。古川柳としては佳句の
部であらう。(五)の「提灯が」の句は狂句である。いかにもく
すぐつて笑はさんとするところに惡趣味があるのである。(六)
の「片假名に」なごは實に幼稚な句である。やはり狂風である
(七)の「手紙には」の句も又文字の上の遊戲で無理に笑はせん
とするところに、この句の惡趣味があるのである。駄句である
(八)の「名物を」の句は、つまらぬ技巧の句である。その解に
「腹のふくるも旅日記かな、食ふより外に能なき人間を罵倒し得て
痛快」であるが、句よりも解釋の方が優れてゐる。(九)の「泣
くくも」の句は人情の翳點を穿ち過ぎて辛辣である。しかし
古川柳として佳句の一たるを失はない。金子子氏の解に「人情の
翳點を穿ち過ぎて、餘りに酷なる心地す。しかし事實なるをいかに
せん。かの赤穂の城渡しにお金分配を唱へし小野九太夫は、この露骨
なるものか」である。その通りである。

次に又前掲の川柳定義を補足するに足る金子子氏の數言があるか

ら録することとする。

「かくの如く、川柳點は尋常な飯の出來事を捉へて、よく滑稽化するのみならず、又最も眞面目なるべき故事、傳説、史實等を題目として縦横自在なる口物を弄せり」

ミ、述べて、(十)以下に於て故事、傳説、史實を詠んだ句を擧げて評釋をこゝろみてゐられる。

それ等の句にも又滑稽化して、痛快がらせたり、苦笑せしめたりするにはするが詠史川柳の殆んどは藝術價値の稀薄なものが多いので、今日では古川柳にならつて作句をしてゐる一部の人は遠より外には詠まないこととなつてゐる。それは全く一つの遊戲の境地を出ないからである。(一〇)の「戸隠れも」の句は故事を知らねば何等變哲もない句である。金子氏の解に「岩戸の細目に開くまでは用のなき戸隠明神なるを思ふべし。讖にて艶ぬくひま人の所作を神代に附會したる働あり」云々。まづこの程度の興味しかないものである。(一一)の句「御紀行拜見」の句も又傳説を知らぬ人にまつては一顧のあたひもなからう。能因法師の傳説を知つて始めて面白く感ずるやうでは句としての詩的價値は殆んどゼロに等しいのである。(一二)の「忠盛」の句は狂句である。その解には「抱きさめしは油坊主なるを思ふべしわざと聯想の一階を飛びこして、高名の場を管めたりといへる滑稽突梯容易に及び易からず」云々あれど、この種の滑稽、突梯こそ眞に厭ふべき川柳の敵なのである。皮相な滑稽は川柳として尤も避くべきものであることを記憶しなければならぬ。(一三)の「その暗さ」の句はさうにか詠史川柳の面白味を出してはるが、どうにか作つたといふ句ひがあるので眞にすぐれた川柳として

は推奨し難い。(一四)の「時致は」の句も又狂體をまぬがれない時致が兄祐成の急を救はんとして、途中百姓の馱馬を奪ひ、あたりで引き抜いた大根を早速の鞭でして大磯に驅つけけるのは會我物語中の快譚であるが「鞭をかじつて」云つて大根を利かしたるなき鼻持ちのならぬ句である。(一五)の「佐野の馬」の句も又作者の想像力から生れた句で、大した佳句だとは云へない。(一六)の「芭蕉は」の句も又一すしたこりあはせに興味を感じたのに過ぎない。大した句ではない。金子氏の解に「湊合の妙を見る。主題の蛙を以て、突然に仕立てたるさるゝ一種の面白味あるなり」云々あるが、蛙をかくして謎々式の句にしたところに惡趣味があるのであつて、もつと直叙すれば多少見られる句ならぬともかぎらないのである。(一七)の「釣れますか」の句は人口に膾炙した句であるが、この句なきは詠史川柳としては尤つてゐる方であらう。金子氏の解に「流石の聖人文王と奇傑太公望との邂逅も、話の口火を切るには極めて平凡ならざるを得ず。たゞ「なごさ」の語、胸に一物ある趣を狀し來りて幾多の波瀾あるを覺ゆ」云々ある。名評釋たるを失はない。

要は古川柳に對して相當理解ある金子元臣氏でありながら、その選まれたる句より窺知するに、いかにも柳狂混淆の譏りをまぬがれぬやうに見受けたので粗上へのほせたまでであつて、その非禮は川柳に忠なるあまりにこの一文を草したものとされて寛恕されたものである。尙、現代の川柳は金子氏の定義圈外に出で、更に佳句の多くを生みつゝあるので一層の御研究を煩はしたいものである。



唐柳短解

蛭子省 二

必變云ふ、一震の威かくの如し、曹操申しけるは雷は則ち天地の聲、何ぞ驚き怖るゝ事あらむ、女徳曰く、我幼より雷を恐れて身を藏る所なきを恨む、曹操之れを聞いて傷りきは夢にも知らず、女徳を無用の人なりと思ひ冷笑す。

(五九)勝相角らしく雲長落手する

(五六)楚の國で酢を一しきり買ひきらし酢をのむと瘦せて骨も柔らかくなる云ふ、輕業師や角兵衛獅子も酢を呑むものである。管子に楚王小腰を好む而て美人食を省くこあり、後漢書馬援傳「楚王愛細腰、宮中多餓死」

(五七)猫に追はれたて莊子うなされる「ちよつかいを出されて莊子曰をさまし」『榮烟で莊子の夢がつるんでる』莊子齋物語に昔者莊周夢爲胡蝶、栩栩然胡蝶也、俄然覺則遽々然也

(五八)女徳はかゆい所に手が届き女徳は身體に色々の特徴を有してゐて、手は長く耳は大であつた「耳たぶの良

唐人が蜀をこり」昭烈皇帝諱備、字女徳漢景帝子中山靖王勝之後、有大志、少言語、喜怒不形、身長七尺五寸、垂手下膝

願自見其耳

雷鳴を大きな耳へ聞いておぢ

雷を聞いて恐れた耳の智慧

「ごろごろこいふこ女徳箸をなけ」雷

までは女徳箸を持ち」曹操手を以て女徳を指さし、又自ら我を指して申しけるは

今天下の英雄は唯御邊ぞ我こ二人也、其言未だ了らざるに大雨降り來り、雷の鳴る事天地崩るが如し、女徳戦き手に持ち

たる箸を取落さる、曹操何を畏れ玉ふぞと問ふに、女徳答て聖人も迅雷風烈則

關羽下邳城に破れ張遼の説くに依り三條件を以て曹操に下る「關羽地上に拜伏す曹操答禮して拜しければ、關羽申さく敗軍の將深く丞相不殺の恩を蒙る、豈答禮を受べけんや、曹操曰、我元より御邊の忠義を知る焉ぞ害さむ……曹操相府に酒宴して關羽を上座に請じて上賓の禮を以てし、回れし使を立て綾錦百匹金銀の器を送る。關羽これを受けても一も我身の用とせず、目錄を添て庫内に納む……後ら曹操に遺書して女徳の下に歸りし時金銀段匹は悉く留めありたり」こ。

(六〇)師匠の花見孫臏が軍立古句研究者には漢字制限は成り立たぬ。

今更に漢籍の素養なきを悲しみつゝ、本稿に依り原書に親しみ勉強して八十の手習をしつゝあれば、努めて原書の儘を記す。孫臏の事は孫子本傳にある。

孫子者齊人也、名武、爲吳王闔閭、作兵法一十三篇 試之婦人、卒以爲將、西破強楚入郢、北威齊晉、後百歲餘有孫臏、是武之後也(孫子序)

少年時代に教へられた十八史略は記憶がある。

魏伐韓、韓請救於齊、齊使田忌爲將、以救韓、魏將龐涓、嘗與孫臏同學兵法、涓爲魏將軍、自以所能不及、以法斷其兩足而歸之、齊使至魏、竊載以歸、至是臏爲齊軍帥、直走魏都、涓去韓而歸……臏度其行、暮當至馬陵、道隘而旁多阻、可伏兵、乃斫大樹、白而書曰、龐涓死此樹下云々

(六一)鹿の皮からあらはれる孝の骨 誠の皮は鹿かぶる孝子なり

刺子は周の人なり、天性至孝にて其名遠近に聞たり、父母老いて共に眼を患へ

しが、鹿の乳汁を以て藥に用ひなば疾癒すべしと、或る醫師の言ひければ、元より至孝な刺子は、如何にもしてこれを得んことを願へり、然れども鹿を殺さば乳を得ること適はねば之を生捕にせんことを計り、鹿皮を其身に被りて群る鹿の中に入り、乳ある鹿を窺ひ居けるに、折しも獵夫來りて刺子を射んせり、刺子即ち聲を立てて曰く、予は眞の鹿にあらざり、我は刺子といへるものなり、親の眼病の藥に用ひんが爲に鹿の乳を求めて斯くせらるなりと、獵師之を聞きて其の孝心に感じけり。

(六二)半分は石で居ながら紙をくひ

黃初平、年十五、家羊を牧せしむ、道士あり其の良謹なるを見て便ち將るて金華山の石室の中に至る、四十餘年復た家を念はず、其兄初起之を索めて見るを得ず、後市に道士の善くこする有るを見る、乃ち就いて之を占ふ、道士曰く金華山中に牧羊兒あり、是れ卿の弟か非か、初起

即ち道士に隨ひ尋ね見る、兄弟悲喜し羊何にか在るを問ふ、初平曰く近く山東に在り、初起往いて視る、了に羊を見ず、但だ白石無數を見る、還つて曰く羊なし、初平曰く羊在る耳、但だ兄自ら見ず、便ち俱に住き初平吐羊起きよといふ、是に白石皆起ちて羊數萬頭と爲る。

(六三)蒼頡が智慧で世界の眼なり

蒼頡は黃帝の史臣とも或は兩儀の臣ともある、鳥の足跡を見て文字を製したと言はる、黃帝之史蒼頡初造書契、依類象形故謂之文、其後形聲相益、即謂之字、著於竹帛、謂之書。

蒼頡も知らぬは鳳の八文字

吉原道中の八文字なきは知らぬ筈、古狂句の慣用手段はこれ以上に悪戯を弄したものがあつた。

文字の起は蒼頡と小松川

關東文字太夫は常盤橋附近に居住したから常盤津文字太夫となつて一派の名が今日も續いてゐる、小松川は隱居地なので

ある。

(六四)朝なごは斯くの通りご老萊子

手あそびを古郷へかざる老萊子

前句は末番ご解されてある。老萊子は春秋時代の楚の人「老萊子玉屋がくるご泣いてみせ」「辰巳屋もいはッ日本の老萊子」

高士傳「その二親に奉養するや、年既に七十に満つれごも嬰兒の戯を爲し、身には五色斑斕の衣を着て少く粧へり、嘗て水を持ちて堂に上り、詐りて跌き仆れて地に臥し、小兒の如く泣き或は誰を親の側に弄へりこれ皆親の喜ばんごを欲してなり」

(六五)陸士衡雁の使を狗でする

陸機字士衡、文章を好くす、陸士衡集十卷がある。異圖ありごなし譜せられ遂に害せらる、時に四十三、身長七尺聲鐘の如しごある。陸機傳「機有駭犬、名黃耳既齋冀京師、久無家問、笑語犬曰我家絶無書、汝能齋書取消息否、犬搖尾作聲、

機乃爲書以竹筥、盛之繫其頸、犬尋路南走、遂至家得報還洛後以爲常」

(六六)七十ではばアはのりをこして賣り

あはれさは七十にしてのりをうり論語爲政篇「七十而從心所欲不踰矩」を利用して糊寶婆さんを味ひだの論語の句の振りに

もみ裏も男の着るはのりをこへ

がある「むごらしい糊寶首が二つなり」「姫を小脇にかい込むで糊やのり」「茶ほうじを釣るした中へ姫ご書き」で容姿がわかる。近世風俗志には、糊寶三都ごもに衣服洗後に用ひ糊也、一文以上を賣る又此徒三都ごもに男子あり或は老姥あり、所荷の具は江戸の豆腐賣の具に似て筐を置きて手ある桶のみ二つを兩邊に擔ふご出てゐる。

(六七)運でのむ徳利野郎の周茂叔

周敦頤字茂叔、濂溪先生ご稱す、宋の大儒、疾に因り求めて南康軍に知たり、熙寧五年卒して道國公に追封せらる、蓮花

を愛するは君子の徳あるに取る、愛蓮説は著明である。

其間御幸よぎなく周茂叔

上野忍池畔の出合茶屋の句

汚泥にしまぬ花を見て不義な事

「水陸草木之花、可愛者甚蕃、晉陶淵明獨愛菊、自李唐來、世人甚愛牡丹、予獨愛蓮之出淤泥而不染濯清漣而不妖、中通外直、不蔓不枝、香遠益清、亭亭淨植可遠觀而不可褻翫焉」云々。

今の世の中になくてならぬ雑誌で今まになかつた

公憤を讀め

この不思議な雑誌の編輯長は「川柳雑誌」の同人 三好革郎君です(略)

定價一部 五拾錢

大阪市北區神山町三三

發行所

公憤社

振發大阪一八二四番

本社二月例會

於 二 月 四 日 夜
端 坊

本社二月例會は四日午後六時三十分から清水町端の坊において開催いたしました。當夜は非常な盛會で川柳のために意を強うするに足るものがありました。

(二柳子記)

夫婦(兼題) 路 郎 選

友達が歸れば元の夫婦なり 露斗
夫婦してお墓の水を替へてやる 毒仙
夫婦もう子供の出来ぬ事を知り 三日坊
のぞきもう夫婦の聲になつて 舟々
お前さ子供で夜が明け日が暮る 三笑
女房に吐られて出る日の續き 柳骨
別々に夫婦用事を片付ける 聞路
仲の好い夫婦さろゝをこしらゝ かほろ
夫婦又コロロが降りてから戻る 凡平
鳥籠の小鳥に似たる夫婦住む 清公子
男湯へ女房がついてくる哀れ 紋太
木綿着の夫婦へチラシはいこゝ來 松郎

夫婦して頃よい味に煮わつまり 同
そゝうした事も夫婦で笑つとき 同
(軸)もう吐るはりの宅と思つて居 路郎
羊羹のこきでもめてる老夫婦 同

松 原 紋 太 選

松原を我が足音に馴れてゆき 松郎
松原に別莊別な道をつけ 京二
松原へ來れば繪葉書程でなし 助六
松原にひきこき目立つ水溜り 二葉
車内からの聲で松原を除行 突支坊
松原を前にひかへて旗を出し 飯山
裏日本この松原で飯にする 路郎
花緒切れてふき松原の廣さ見る 舟々
松原は小川で切れてまだ續き 同
病院のほかに松原あるばかり 彩秋
松原の中にブランコ音がする 同
松原へも一度用のロケーション 萬よし
竹の皮この松原で年を越し 同
袖 口 互 選

袖口を合はずに母を手傳はせ 酔夢
袖口の奥に毛糸の腕が見ぬ 酒水
ゆきたけの合はぬ袖口氣にかゝ しづか
袖口をかすゝ見せて舞妓舞ひ 加香
袖口のほつれを知りつやもめを 三日坊
袖口で三味綿桿をすべらせる 久郎
袖口で笑ふ娘は戀を知り 銀燈
袖口をつくらう母のクサメ聞き 突支坊
袖口に納得したる顔になり 大閣
袖口のやぶれを母に隠してる 案山子
袖口を吐られ乍ら立たされる 山花紅
袖口へ手を突つ込んで値がきき 彩秋
袖口の柄のよいのではやく切れ 仙秋
袖口を氣にする程のしじさなり 聞路
袖口を氣にしておつな唄ひ振り 清公子
筒袖の口を合はして値が出来ず 川洞
袖口の粹が昔を語つてる 五月
袖口を濡らして子供歸つて來 舟々
急ぐ程合はず袖口じれつたく 九紫
袖口がよう光つてる男の子 京二
洗濯のたびに袖口いたんでる 憲翠
奴唄の型で袖口揃ふなり 三笑
袖口が木綿のまゝに生きのびる 柳骨
袖口で船一隻の値がきまり 毒仙

懐手のれんを威勢よくくゞり 泗水
 ふさころ手見得程心落付かず 山花紅
 三筋はぎ通り越とるふさころ手 二柳子
 懐手チラシへ一目くれたッけ 水鏡
 ぬうつさ来てまうと出て行く懐手 同
 懐手添乳の妻まごてゝゐる 二葉
 懐手共鳴をする姿なり 同
 懐手一人が叱られる 醉夢
 懐手のまゝで盗人さらはれる 同
 ふさころ手して二階借戻つて来 ひろし
 叔父さんにまづ叱られる懐手 同
 たよりない欠伸をしてる懐手 静雲
 懐手頭がかゆいなご思ひ 同

懐手よばれるつもりでやゝ来る 京二
 懐手買ひたいものがたんご有り 同
 何遍も読み返してゐるふさころ手 女水
 大欠伸二つ續けてふさころ手 同
 生意氣にふさころ手する乳母車 天海
 懐手花火の落ちたごこを知り 同
 懐手ヴェニスの唄を忘れたり 凡平
 帳場まで来て懐手歸るなり 同
 懐手遊た女を思ひ出し 萬よし
 ふさころ手して悟つたにもあゝ 同
 首筋に少し風ありふさころ手 助六
 懐手利子で食つてゐる譯でなし 同
 邪礙くさい手を出さゝれる懐手 同

懐手ついでの話多いなり 聞路
 ごうしても工面の出来ぬ懐手 同
 懐手理くつに合ふた事を言ひ 同
 懐手疊も替へなならぬなり 飯山
 懐手姉はまめくしう動き 同
 懐手下駄はあるべきごこにあり 同
 浪六に救はれてゐるふさころ手 刀三
 懐手柱に添うて立つてみる 同
 武者小路流に生きてる懐手 同
 懐手いつそ養子にゆくごきめ 路郎
 ふさころ手別に肥つても居らず 同
 懐手もう牡蠣船だなご思ひ 同

▲宮尾しげを氏より 神戸三越に

て廿三日迄開催中のアイルランド及日本
 兒童自由齣展へ岡本先生の代理で席巻に
 來おります。廿四日六甲へ上つて廿五
 日から始る大阪三越の漫展へ派出され
 ます。いづれおめもじを致しますが御換
 拶まで(一、二、三、神戶下山手六丁目庭出
 旅館内宮尾しげを)

▲野口雨情氏より 拜啓水い問御

無沙汰ばかり致しました。御作や御選句
 はその都度拜見致しております。こんど
 下阪の折は久し振りで拜顔を致したく存
 じます。奥様や御令嬢様へも宜敷御願仕

ります。拜具二、四、
 ▲蛭子省二氏より 謹啓大寒入り

から當分寒さ厳しく一昨夜はさうごうや
 られて元氣を失ふ、今日は午前中に二回
 沐浴、此時文けは天下泰平二月號の配達
 を受け直に湯から飛出す、今度の川柳塔
 は大に奮つてゐます「五番目」の句の事
 聊か詳細にかき岐阜に送稿これも多分二
 月號に發表されましよう、不思議に同時
 になつたもの也貴稿大に樂む、實は私
 がやりたかつた、老母のお彼岸の寺詣が
 済むでから出掛ける事に致しました、丁
 度此時分福岡市に博覽會がありますれ。

馬行さんのお目出度によろしく、回覽誌
 には加はり度いものです。一、二、九、
 ▲安川久流美氏より 前畧さても

深い雪です、毎日壓死するもの類々。昨今
 の市内は、「戰場」でも形容したい位の
 凄じき峠道を歩くやうな往來に長い男が
 ぶつたり轉んだりする實況をお目につけ
 たい位です、雪に埋れた小さい家の中に
 親子三人生きてゐる丈けがしあはせださ
 思ふ、夏は涼しい風を送る樟も雪をかぶ
 つて儂濟きまはまるもの(二、一、〇)

(主幹宛私信より)



柳 評
釋 樽
廿 四
篇 まで (二)

麻 生 路 郎

(三) 初 篇 の 句 (續き)

雀形たゝいて雪のちうしんし
吉原の冬の朝の情景である。夕べの夢のまだ醒めやらぬのに
外は雪こなつたのであらう。禿か誰か、ひき廻した屏風の背
後をたゝいて雪のふり出でたこを知らしてゐるところを詠ん
だのである。この場合「屏風をたゝいて」と云はず「雀形たゝ
いて」と云つたところに作者の手腕がある。「雀形」は雀が翼
を張つたさまを圓形に又は菱形なまに描いた模様であつて、屏
風の裏張りは殆んまこの模様であるところから、雀形と云つた
だけで屏風の背部をきかしたのである。今でもこの雀形はかな
り廣く用ひられてゐる。斯うして、一々碎いて評釋を試みるこ
こは多くの場合詩としての情緒をこはしてしまふおそれがある
けれども、初心者にまつては、ある程度まで止むを得ないこと
であらう。

百兩をほぎけば人をしさらせる

小判百枚ばらゝゝ、ほぎいた百兩包。もしか不足してゐて
疑ひが、かゝつてはこそばにゐる者がおのづこ身をひくこを
穿つたのである。

昔の百兩と云へば非常な大金だつたのである。黄金光りの燦
然として眼もくらむばかりであつたことであらう。

古郷へ廻る六部は氣のよわり

異郷の土になるこはたまらなく悲しいことである。旅から
旅へ、神社から神社へ佛閣から佛閣へ巡拜こそはしてゐれど
こゝろの安心はなかくに捉へるこが出来ないのであらう。
急に故郷が戀しくなり、豫定を變更して故郷へ向つた六部の心
裡を掴んだのである。人間のこゝろの弱い一面が遺憾なく出て
ゐる。

鍋いかけすてつべんから煙草にし

呼ばれた家の軒先で腰をおろし、先づ竈で火を起す。起した
火で一服喫ひつける鬚掛屋の悠長な態度がハツカリ描き出され
てゐる。外の職人であれば、一ト仕事してから煙草にするこ

柳談會漫錄

井上 三刀

この日路郎主幹を始め、莢豆、万よし（令嬢さし子さん持參）、二柳子、松耶、ひろし飯山に小生が乍假りに大阪方さし、紋太おん大の率ゐる嶺月、素生、夢遊が假りに神戸方さしでも申すべきが、兎も角一騎當千の強者ばかり、これにまた珍らしや海を一つ隔てた朝鮮の右大臣を加へ、柳壇行事、柳談會は、茲に完く成立を告げその幕を明ける事になつたが、唯一つ心淋しい事は、何日も聖母マリヤにも似る氣高きを見せ下さる蘭乃女史が、お子さん看護のため一度も顔を見せ下さらなかつた事だ。その代り十六七の實に可愛らしい氣さくな女中さんがいろ／＼世話を焼いて下さつた。

談話に先だつて先づ作句する事になつたが息詰る様な空氣はこの時分から孕みか

ける。全くこの場面は、恰も眉秀で氣骨稜々の武夫が暗夜窃に水も滴る氷の刃を磨くにも以て、この凄壯な寒氣からは巧雅は兎も角不真面目な句が生れやう苦がない。

夜の驛柱々の灯が靜か 紋太
 寝る時に鳥打帽が鼻へ来る 同
 石段を飛ばして急がねばならず 右大臣
 丹前を着て玉撞くも温泉場 同
 新聞屋あやまりに来て斷られ 嶺月
 氣の毒な禿を世間が又笑ふ 夢遊
 妻さ出し日のカツレットの美味かりき 同
 時折は子にいさかひもして夫婦 素生
 覗げこにいつのまにやら筆がふね 飯山
 心配をさせまいとして父は起き 同
 友達へ國からの餅やいてやる 同
 妻の留守林檎が紅いだけの部屋 ひろし
 雪雲が私の夢をさつてゆく 同
 鐘紡を投げて妾に惜しがられ 刀三
 御祝さ書いた以来の視箱 同
 蚯蚓の日和見菜の花が溶けかけり 莢豆
 醫者の眼のつやはひみつをいほは 同
 挨拶のうちお土産を子さもあて 萬よし
 有がたう／＼押ししてくれたは居す 同
 青みかんはかをりがします 同
 争うて乗らないたちに育てられ 松耶

佛壇へ直切つた蜜柑供へられ 同
 うら／＼か父のひざにも母のひざに 同
 あいさつが風邪をひいてる事にな。 二柳子
 往來の人は無言の寒さなり 同
 日一日下情に通じしられる 路郎
 レディーメド借りた金から出る 同
 右のやうな結果を得たが引續き、各自句に就いて猛烈に批評さ意見を闘はし、偶く口角泡を飛ばし過ぎた結果、其間凄壯な場面も醸したが、徹頭徹尾研究的であつた事が嬉しい。

紋太氏の諄々さして長閑な批評、松耶氏の噴瀝を加味した兄貴振りもよろしく、莢豆氏の詩的價値を論ずる明快ぶり、飯山氏の飽迄堅實な考證的意見、夢遊氏の「妻さ出し日のカツレットの美味かりき」の幸福な現實暴露、素生氏の純實、嶺月の氏の澄澗さも速記者を雇入れたい程の素晴らしさで天晴れ當代の武者振をてんでに發揮して訥辯の小生を悲しませる。名論卓説を一夕附のカードに記入してゐます云ふ風に二柳子が最も地味に謹嚴に机による。仲々もつて重味のあるタイプ

でいい。ひろし氏の「雪雲が私の夢をこつてゆく」に對して私が峻烈にやつつに掛るに、旗色不利と見てか同氏案外もろく逃腰たじろごあるを、何ぞ圖らん英豆氏の邪魔が、あべこべに形勢一變微笑禁じ罷はずである。娘御を温かい炬燵へ一時預けてからの方よし老ならぬ方よし青年が急にお父さんといふ厄介極まる意識を割引して一句々々に透徹した名論を吐く恵まれたる方よしなる哉である右大臣氏はこれ等の論談風發に聊か驚いたまふ風に殆ど沈黙を續ける。

其處で先づ一座の活躍振り活殺自在妙くもタイトル付きの映畫の如く叙し來つたが、場面は變つて其翌朝の事、路郎主幹の大寫しに相成りますが今度は一番に一番のかね合ひ、暫時の間は御靜聽な相願ひたい。

師の批評態度は、雜誌の上で拜見するよりも寧ろ切實なものである様だ。

だからその聰明々晰な所論は何時も結論になる。舌端火を吐く師の論ずる所は

實に部分的交々批評に鋭いミツメを刺して終ふがこれは我々にまつて頗る魅惑的である。希はくばこの魅惑を一蹴し得る闘士あらば來りて柳談會記録に名をミツめよた。

例に倣ひ話題は、此日の珍客右大臣氏に朝鮮の話を馳ふ事に満場一致したが。「朝鮮の話」にはあまりに漠として掴み所がないま云ふ右大臣氏の言を諒し、それでは各自が勝手に朝鮮秘話を同氏から引抜く事に決る。

松耶氏は専ら花柳情緒方面の賣向を踏當し、同氏に情緒纏綿たる泥を吐かせた末甚だ得る所あつたが如く御御嫌がよい彼の地に於ける國語、風俗、食料、家屋等の質問應答に續いて、思想、行政、云ふ風な、政治家にでも聞かして上げたい眞面目な話になる。最後に朝鮮をこれ以上知りたいた人は一度渡鮮する事と積極的な右大臣氏の提案にこの興味深き談話を打切る事にした。

ルビ黒ヒサア
ントシンボリ 飲料 清涼

ア4ヒ

3



川柳塔

○ 喜田 飯山

ほめられて淋しいなかに後家を立て
顔をそるごも勤めてるればこそ
一寸した風邪に短氣を出してゐる
あんなご仰せられるごふられてる
子心にわが親ばかりひいきして
遠方を來てくれた人酒もいけ
ごん底のくらしをしたいなきごいふ
酒の粕でも焼かうかご夫婦きり
ほけつごがありや手を入れてうれしがり
みな拭いたごごでたゝみの數が知れ

子を呼ぶごゑに外聞もなし

嫁くさきの近すぎるのも耻しき
恩に被てるるごは見せずよそくし

○ 檜山千代二

叱られる内こそつながらる心なり
振切つて見ればごつちも人の子よ

御大儀を奉送して (二句)

皇禮砲悲しむ人の波に來て
あたりを拂つて御名代の宮
藩國の襟黒ずんだまゝ春が來る
それはさうでありたいものよ責任者

○ 高見柳骨

早まつたゞけが私の損でした
舊式で行くご親父は念を押し
熟練が恐しくなる輕業師
便りから心の奥を見ぬかれる

○ 塚崎松郎

子供病んでる影も病んでる
母の留守ごんなにさびしがられしか
病みし子に母の胃袋ふくれたり
子の玩具それく目鼻もつてる
鼠々お前を恐れた子は死んだ
弟へ何ッて威嚇もつてる
父に云へば叱つてくれるご信じ
習字の前に母親かたづのんでる
末の子のいゝごばかり眼について
父の部屋子供心にかしこまり
ぬくい寢間すべてのものに感謝する
親戚へ來て卒業の四角張り
薄情を一つ二つご指を繰り
念佛に對してさろけさうな母
諦めて膳に坐れば飯の湯氣

藝者を前に友達のみな馬鹿に見ゆ
自動車降りてわしぢやがなわしぢやがな
嘘を云へ履歴書一つ書けもせで
平凡な男言葉の行きまき
御機嫌のいちいち金に見積つて

○ 矢田右大臣

ストーブをかこみ戦争あればよし
勝つまいふ事辯護士でいて來る
寒うなる事を新聞書きつゞけ
風呂敷のぎれを借りてもしわがなし
靴直し日向で眠う縫うてる

○ 松本助六

別荘は未だ春でなく冬でなし
栽培の廣さに記者を驚かせ
流連の素氣なくされて飲み直し
せんざいへ旦那を訪うて苦をほめ
町内の祝取り換へさく暮らし
末の子をあぐらの中へ入れて飲み
夕焼は暮るゝに未練ある如し
言ふ折に言へず言へない折に燃ゆ
靴下をあんて呉れてるごは知らず

軍人にしてはあんまりさばけて居
猫の眼のやうな男で儲け得ず
食堂へ来て萬引のほつこする
荒つほく立つて電話へ小言也
中腰になつてボートへ女乗り
恐ろしい格氣であつた夢が醒め
酔うて寤て醒めておいてけほりを知り
襟替へてからも年をば隠す氣か
媾曳の女は地味な姿で來
バランスがごうのかうのさ女事務

○ 酒井 駒人

裏口へまはりや出戻り障子張り
生きて居る金魚の上の厚氷
立ばなし女空家の方を向き
鶏は賣つたさ母の淋しさう
洋服をきてらに着替へ父に似る
旅に來ては提灯の火さへなつかしく

○ 安井 ひろし

葉牡丹に白々暮るゝお元日
電氣風呂に滿腹不平なくつかり

重い空氣將棋はまけこなりにけり

○ 林田 馬行

ステッキも持たず夫さなりにけり
戦ふんだくに妻顔きぬ
青空にほつく癒わる氣持がし
好きな句を夫の留守に選つておき
幸福を箆笥の艶に見せてゐる

○ 庄 萬よし

名義だけ持てまはきついおだてやう
日日を試験ミ見てるおもしろさ
酔うてたですませぬ寄附の五圓也
靴は俺があつらへようこ小半年
通天閣おれも寒いさいふ形
おまるりで隠居の用は七分すみ
二々言で自動電話の用はすみ

○ 橋本 二柳子

さびしさは椿の花の落ちた音
温室へ寢さして乳母の洗ひもの
道行く人の姿は面白いもの
知れ切つたこまこ女に言はれてる
子供だけに變屈の云ふまゝになり

粒々集

句稿(二)

木村半文錢

春はけに枚をふくんで待つ如し
春や春龜は地を這ひ鶴は立ち
大阪を旅立つ夢に煤が落ち
石炭にかごごがましき文明よ
貧乏も逆ばりつけも徒爾でなし
道徳の前に蛤口を開け
この世での蓮華開けば露が落ち
廣島榮朝の重荷の中を買ひ
雲が降り兎は自己を見失ひ
竹の皮さあ人生を包みましょ
胸を打つ時計は進む一二秒
このわたの箸のさきから春が見ぬ
三十九むざんや夜着の壓を知り
道を行く芭蕉の足に霜柱
アプサンの火炎さなりし夜の別れ
道遠く机の上のしやれかうべ

ピストルの銃口揃へ待つ兒等よ
南無大師金堂灰さなりけりな
魔睡よりさめて大空に鞭をすつ
魔睡劑汝の靈の不淨よな
魔睡劑久遠に生きし男にて
魔睡劑夕闇迫る地の二尺
魔睡々々役の行者を喝りつけ
春に來て假死の姿を見る勿れ

蛭子省二

汗の實に妹の世帯高く買ひ
ひさり座れば茶畑に乞食みゆ
言葉少なく餅焼く母さならび
柚子味噌にあき縁を切る横顔
越してきた子供かたなで犬を追ひ
妹さ榎を仰ぎ十年たちぬ
植木屋はくはへ煙管で猫をみる
妹の子におこされて腹ばへる

近什

安川久流美

穏やかに降る雪空を見上けたり
人間に慣れてゐる鳩雪を踏む

二度目の元旦と 二三一のの、と

大島 濤明

二月二日—けふから三十三日前に元旦を迎へた、寂しい新年を迎へた私は今日又元旦にぶツつかつてゐる、則ち支那のお正月である。大連は十二月から二、三月頃にかけて馬鹿に休みが多い、クリスマスだといふて毛唐にあやかり、一月には日本人の正月をやる、暫くするに支那正月、お節句、節分など、年中行事を二重にも三重にもやらねばならぬ。満洲に棲んだら再び日本で生活は出来ない—とよく人が言ふ、日本はコセくしてゐてさうも居辛い、この休みの多いことから考へても満洲は香気なものだ、こつこづく思ふ。

支那では寂夜から徹宵爆竹を打ち續ける、日本人などはやかましくてゆつくり寝るこゝが出来ない、元旦は終日門戸を

閉ざして馳走をたべ、銅鑼や太鼓で囃しきうしである。日本の正月はひつそりしてゐるが支那のは鳴物入りで賑やかなものだ。

南畫の大家飯塚米雨君の川柳は堂に入つてゐる、この間も近作さて二三句を送つて来た
長火鉢から飛んで来る紙礫 米雨
三の糸だいぶゆるめた雪見舟 同
米雨君は有りふれた藝術家並に酒が好きである、酒を與へて置けば一日でも二日でも酒に親んでゐる、そして盃のひま

には筆を持つて漢誌を作つたりしてゐる大連市會議長の立川四馬翁も亦斗酒辭せぬ方で米雨君と好個の酒友である、又詩友である。

米雨君が先年北支那漫遊の途次大連に立寄り四馬翁居に假泊した、偶々書家水木齋堂、篆刻家荒木天空、俳人有二並に庵主三濤明の六名が相會し酒盃漸く盛。毀譽褒貶不關焉。卓堂

詩酒風流以外天。誰識人間真趣味。天 堂
醉中有此六歌仙。米 雨
筆を採つて駄詩續發、氣焰至らざるなし終りに濤明、
自惚が出て人間の正直味 濤明
の一句を專して詩人連を晒然たらしめたこゝを思ひ浮べて、米雨君の柳信に一層の懐かしさを覺ゆる

諒闇に遭ふた柳人の幾句を謹誦、そのうち私の尤も名吟さして感動した句の二三を擧げて見るこ
謹んで座れば寒い膝頭 錦 浪
草莽の臣かなしみの炭をつぐ 路 郎
民族の血を淋しさの底に知る 夢 二郎
よろづ世の中になしみる臣 溪花坊
みあかしは消へ御林へ迫る闇 劍花坊
なごの句は如何にも神々しく、今更ながら川柳の力さでも言はんかゝる感ずる、最後に私の奉悼句を謹書する

短詩時代來たる

喜多 一 二

川柳はあくまで川柳であらねばならぬ
—いふ平凡にして深刻なる命題が今の
私にこつては切實なものとなつて来た、
同時に私は過去に於いて貧しいながら
も氷原や影像にのせて来た議論や創作を
かなぐり捨てたい悲痛なる氣持になつて
ゐる。

私がかつて／＼影像に書いたやうに私の
革新川柳へ入つた動機はきわめて單純で
あり必然であつた。

それは私の周囲の柳壇(金澤柳壇)の
態度がきわめて微温的な、戯作的な遊戯
に耽つてゐたこと、それらの川柳によ
つて私の内的生命の要求としての詩を盛
り込むことの出来ない……つまり換言す
れば、あまりに私の心の詩さかけはなれ
た既成川柳の駄シヤレの多くを見せつけ
られてゐたことなごであつた。

そこで私は私の詩を盛るべき銀皿を求
めた、それが私の北國新聞柳壇に於ける
異端的表現であつた、その異端的表現が

今顧みれば私の輕蔑してゐた既成川柳の
安價な人生觀照よりもはるかに主觀的で
あり、感傷的であり、概念的な十七字の
羅列でしかなかつたことを今恥しく思つ
てゐる、ちようぎそのときであつた、安
川久流美氏が百萬石誌上に於いて、私た
ちのこうした安價な新しさを「土人の太
陽を追ふ如き愚かさである」を輕蔑され
たのは……

けれご其の頃の私は、氷原を知らず影
像を知らず、大正川柳を知らず……恐ら
く私ご、同じく異端的な……今思へば感
傷的な小主觀な川柳を新聞柳壇に發表
してゐた福村一路君が、川柳革命の先
驅者であらうさいふ、世にも大外れた抱
負ご自信ごを有つてゐたのである、こう
した大海を知らなかつた井戸の蛙の姿が
無邪氣な可憐なものにして今私の頭にう
つて来る。

私は一圖な既成川柳……あるひは古川
柳なきへの熱烈的——盲目的な反逆否定
のために川柳ごは何ぞや——さいふ川柳

の本質をつかむことの重要さを忘れてゐ
た(ご言ふよりもむしろそうした古川柳
なきの本質研究は私にこつては無駄な努
力であるご思ひ込んでゐたさいふ方が適
切である)。

だから私の革新に入つた動機が如上の
單純ご薄弱ごでしかなかつた、従つてそ
の創作も詩論も單純ご薄弱ごであつた、文
藝雜誌による文字の受け賣りご、安價な
活字に患わされたニヒリズムご、先人達
に認められたい賣名的野心ご……其の外
何物もないあわれさでありおそまつさで
あつた、それは私の所産でなく——ひご
しく借物であつた。

私の川柳ごは何であつたか——
それは「新しさ」に酔つぱらつたピエ
ロのたわごごではなかつたか——手淫
の如き自惚れをほしいままにしてゐた
ピエロの氣まぐれさではなかつたか

私は今その空しさをひし／＼心に感
じてゐる、私は私の過去の安價な陶醉ご

自惚れ無根底をふみにじり新しく生れ出た川柳の一年生として歩んで行くのだ、まづ私の前に現れたるものも必然なる仕事としては古川柳研究がある。私は川柳を新しく生かさんとする『真時代の川柳詩人』の出発點は古川柳の深き研究によらねばならぬと信じてゐる。

川柳はあくまで川柳であらねばならぬ。こころした平凡にして深刻なる『内』よりの實感命題が新しきれいめいにむかつて旅立ちする私の荷物である。(未完)

所謂穿ちを排すべし

安井寛

川柳は穿ちである穿ち即ち川柳だといふのが従來の大多數の川柳観だがこの穿ちのために川柳は墮落したのだ。穿ちの極は末摘花の破廉句をつくり、狂句の外道にまで落ちたのだ。川柳の穿ちとは技巧だ拙な技巧が詩を無價值にする事、ト

ルストイを待たず路郎先生の言をきくまでもない事ではないか。

現代人はもうつくりもの、穿ち川柳には躊躇なくやつて居る。

余の友人で川柳のファンである前野醫學士は(知識階級の人)ミしてあける)

居候三杯目にはそつミ出し

なごの句には興味がもてぬといふ。川柳に蕪人の人でも少しく川柳を通過して居る。單な穿ちに終始して居るものにはあいそがつるのである。従つて所謂穿ち川柳ではいつまでたつても社會に認められず高座から川柳子へさあつかはれるのにすぎぬ結果さなる。

川柳作家は作家それ自身川柳の人生觀に生き、皮肉にして諷刺的な思想を持ち民衆をひきいるの概を有して詩的感情の豊かに藝術的衝動によつて句を生まねばならない。

小集的な所謂穿ちを排して深みのある大集的穿ちに生きる事が川柳を光輝あら

しめる所以である。

俳句に於ても(又しても俳句かと思ふがさうも川柳には文獻が少くやむを得ない)俳句の生命とされて居た所謂季題趣味を排してからの發展はめざましい。碧梧桐、井泉水等の日本人、層雲時代から海紅、三味までの努力が一方季題趣味俳句を刺激して今日の俳句界の股脈を來したのである。

恐らく俳句界に季感趣味打破三十七字から解放の二つの運動がなかつたならば句は隱居か床屋の他、今日の青年をさらへるころはなかつたと思ふ。

川柳を車夫や馬丁にも作れるたやすい詩型であるといふ安價な満足に終らしむるなら社會は永久に川柳をみくびるであらふ。

所謂穿ちから解放される事によつて、川柳はフレツシユな創作味に恵まれるであらふ事が期待される。

心からの水の音なりころり 莢豆 草を流し心をして流し 同

若葉ふさ／＼金比羅語でした
弟は黙つてついて来てくれる
竹の皮竹にいごまを告るなり
同 同

これらの句が如何に自由に自己をうた
い得自然に對し溢るゝかばりの親しさを
示して居り。作者の深い心の底からにじ
み出る川柳の人生觀の表現であつて、な
んぞすばらしく創造的な大乘的穿ちにし
きて居るか、わかるであらふ。即ち川
柳の領域を擴げ新しい時代をつくりつゝ
ある事がうなづける。

大乘的穿ちとは句の文字の奥底にひそ
んで居る、作者の落ちついた人生觀であ
り、洗練された人格であり、大空滋味の
如き深い川柳味であり、ときには冷やか
にほくそむな、白刃のように人生をみつ
めて居る誇へである。刀三君や馬行君の
言葉ではないがたわしや、草履のような
均一川柳に消れてなくなれ。新鮮なビチ
／＼に生きた川柳よ生れよ―そのときこ
そ社會はお前を歓迎するであらふ。

(一九一七、二、六御大葬の前夜記す)

自個標準の句と 鮎のそろばん

安川久流美

先生といはれる程の馬鹿でなし
ではないが、この頃私のやうな不細工な
川柳屋に對つて。

『何卒短冊を一枚』
なんて突飛な人から、注文をうけるのだ
私はこの時、謙遜する程の大家でもな
く、又直ぐ様はねつけるやうなブル大家
でもない。

『ハイ／＼』と軽く一言のもさになぐり
書をする。一體私は短冊や色紙のごこ
やら好きなものゝ一ツである。(形かも
知れない)

その無垢な紙の上へ儂らぬ筆の墨を投
けるこはい、氣持のものである。
最近この至極カンタンな注文をうけた
時、私は、その二枚をかけた。句はもち
合せの。

生て居る幸へ米屋が取に来る
汗をふく爲に手拭染めざりし
の、フト舊作の、その時頭に泛んだ句で
ある。

私はこの時、誰に遠慮もなくスラ／＼
と書いた句を、一面、私の標準的作品と
いひたい。つまり自作に私が幾分惚れて
ゐるのである。でさうしても、川柳の世界
的統一なんてものは到底及ばぬこゝであ
るが、自分個性の『標準的』といふ句は
屹度あるものと思ふ。

その佳作が即ち川柳味である。

川柳の味は、この頃北國特有の鮎の味
である、ピリツとさうまいものである、こ
れは北國へ旅行して、鮎の生きづくりを
味はつた人に、その對照をして貰ひたい
のである。

鮎のつくりに大根卸を交ぜた酢の物
を鮎のそろばんさ郷七にはいふ。

これは鯛のうろこが十露盤の玉のやうに見ゆるからである——こは私が獨斷でなく、獨創的の警句である、誰か鯛のそろばんを川柳にまごめる人はないか、私はそれ程の寒鯛のつくり——又はそろばんを贅美する。

生きてゐた鯛食膳に生きてゐる
こでもいひたい程、その新鮮さを賞美したい。

私じや河北の高松生れ
鯛のそろばん味を知る。

斯う俗語めいたものをかいて、筆を擱く。

私は各地川柳家の郷土を踏まれる時、必ずこの鯛の料理をすゝめたいと思ふ。

(二月廿七日)

江戸生れの句に就て

麻生路郎

柳樽初霜の劈頭の句

五番目は同じ作でも江戸生れの句に就て、岡田博士から次のやうな異

説があつたので、いささか卑見を述べることにした。

「五番目は同じ作でも江戸生れ」此句の作者も、同じ作と云ひ、六阿彌陀全部行基の御作たることは知つて居る、然らば五番目をなぜ江戸生れと評したか、所在地が上野であるからと云ふ意味でなく、他の五阿彌陀と違ひ麥飯を喰はぬといふ意味と思ひます。例句

五番目の彌陀は麥飯嫌ひなり

(江戸ツ子麥飯嫌ひ)

成程よく考へて見れば、さうした考へ方には無理が少いやうに思へるが、果して作者自身の句意は何れであつたか。直ちに判別し難い。こいふ譯は六阿彌陀に就ての穿ちの句は一句しか出来ない譯ではないから、従來の句解による句と岡田博士の例句とを別にして兩立させることが出来ると思ふ。

であるから「麥飯嫌ひなり」の句があるからと云つて「江戸生れ」の句も麥飯が

嫌ひの句意であるとは斷定し難いと思ふ殊に麥飯嫌ひの句はずつと後の句ではないかと思ふ。勿論岡田博士もきつこさうだま云はれてゐる譯ではなく、右の「麥飯嫌ひなり」の句なきから見れば江戸ツ子は麥飯が嫌ひであるから「江戸生れ」の句もさうした解釋の方が自然ではないかとの御意見であらうと思ふ。

琴柱とは

蛭子省二

一月號拙稿に引用した古句

小姑の琴柱と不和な名古屋打

の琴柱に就て一讀者からお尋ねがありました、名古屋打に對照した響の事でありました、簡単に用例文を記せば「浮世風呂」に

おしつ「おかたじけ、そんなら一緒に上らう。コウおめへ、此中の響をさうした。かさ「京打か。(中略)しつ「おらもの角琴柱はチト來たから打直させうと思ふよ。かさ「フムさうするが

能はな、角琴柱を止し己か様に昔形にしての云々

べか「……オヤ損も徳もさいへばお猿さん聞きな頃日まで挿た、京琴柱の響の。さる「ウム。べか「あれを下に遣て挿込みのある響さ取替たがの二宋さ六百いくらか足たはな餘程な損をしたよ。

三人の名人

萬よし 生

支那には「鬼神を語らず」さか「道は近きあり」さか中庸を説いたのも多いが、三國誌や水滸傳になる超人鬼神に等しい豪傑が出て来て溜飲を下けさせる小酒井博士の説に従ふさ「原則より變則が健康で幸福で仕事が出来ろ」そうである。馬は平道で倒れるが山道には倒れない。川柳にも宜い意味に於て一癖ありたいものである。

(一) 三味線鶴松

鶴松は西品松島邊の材木問屋の長子に生

れた盲目の長男であつた。天成の美音は文樂の青年太夫として前途の光明を唄はれて居た時分、美音が仇をなし水銀を呑ませられた。一トたび太夫が水銀を呑む聲帯の破滅であるから、太夫の湯を汲むのは秘蔵弟子に限られるものだ。盲目の青年太夫の湯呑みに水銀を投じたもので誰だつたかは、秘密の多い芝居道の事にて詮議もせられずに彼れは太夫として生命を斷たれた。泣くく三味線に投じた此天成の音楽家は糸に於ても間もなく一家をなした。三味は太夫の女房役として、剛柔、緩急、太夫について行かねばならぬが、彼の剛腹は自分の力量以上の太夫に認められたが、自分以下の太夫にははい斥せられるやうになつた。加にははい斥せられるやうになつた。加之の盲目の三味線は、態度が滑稽に見ゆる場台が多いので、文樂に居られなくなつた。かくて彼れは走つた弟子してはななく彼方此方の素人淨瑠璃の三味を弾いて浪々の生活を送つてる。彼れの女房は、低脳の一人の男の子に彼れを残して第二の

愛人さ出奔した。彼の眼に這入つても痛くない男の子は二十年近くになつても腹が立つさ三日ぐらひ挿入れへ這ひ込んで寝てる念入りの低脳である。彼れは小鳥が大好きであるが、小鳥を買ふて来るさ籠から握み出して、惜けなく接吻を與ゆるので三日も生きてた例はない。金魚になるさこの飼主の接吻で一時間の生命は保てない。彼の三味線の胴はいつも眞黒である、新しい三味線を買ふて来るさ、この恩愛の接吻は棹から胴へ萬遍なく投げられるため旬日にして眞黒になる譯である。

一日素養連中の遊興中彼れを辻を流す按摩に仕立て、呼び込んだ、按摩半ばに厭がる彼に細の三味を持たせた。勿論二ツ三ツの端唄は苦もなく弾けたので並び居る太醫者連の眼を圓くさせるに充分であつた。この穢い按摩は、孟を管め廻す習慣の持主であつたこの孟が各姉藝者へ廻されたので一層眼を圓くさせた。併し最後に三の絲一本で三勝のサワリを弾い

募

集

句

支配人 村田鯛坊 選

川柳家の戸籍調べ

保馬 馬行生

(一)姓名 (二)雅號 (三)別號 (四)現住所 (五)生年月日 (六)職業 (七)好きな句 (八)好きなタイプの人 (九)自信の句 (一〇)川柳以外の趣味 (一一)配偶者の有無 (一二)嫌ひなもの (一三)川柳に手を染めた年月

(10) 大谷 五花村

(一)大谷五平(代々此名を繼いで居ります、舊名五一郎) (二)五花村 (三)白日會(ひるのや、ミ讀みます。初め夜の家、云ふ號だつたのを大正五年五月より劍花坊氏に貰ひたるもの) (四)福島縣白河町(本宅は西白河郡五ヶ村にあります、村は不便なので白河町に別宅があります、是を白日莊と名付けて、東北川柳會の事務所として居ります) (五)明治二十四年七月二十七日生(六)小銀行の専務取締役(本宅は酒造業をやつて居りますが、忙しいので遂今では銀行専務で暮して居ます、七)川柳なら何でも好きで特別の好きな句もありませぬ(八)まあ丸齒の女が一番い様です(九)駄句ばかりで自信の句さへ見付かりませぬ(一〇)運動方面なら野球、庭球です、其他は妙に建築に興味があり殆ん三年中居宅をこわしたり、新築して居ります(一一)初めつからの妻

さり氣なく聞流しごく支配人 柴光
支配人ちほごなれたペンを持ち 天塊
令嬢の御用も足りる支配人 利劍坊
支配人舊正月の國へ立ち 鎌月
方針をたてかへて見る支配人 志郎
正直に勤めて今は支配人 山月
履歴書の外に尋ねる支配人 聞路
支配人應接間だけ笑ひ聲 穂波
支配人腕は益々冴ゆるのみ 彩秋
宴會の日記がつづく支配人 吐露樓
退出のやうに見てる支配人 濁水
不渡にかうして居れぬ支配人 のぼる
支配人矢張り上見て暮して居る 銀燈
支配人別荘に居て善なし 鮎美
支配人ニツクネームでこはがら 繁松
支配人仲人をする仕儀ごなり 山雨樓
長く見てあわてぬごころ支配人 千代二
支配人まだ知らない損があり 三笑
慰安會長口上の支配人 久雄
苦節三十年にして支配人 突支坊

支配人藝者の年を又尋ね 秋晴
支配人今來たばかりもう飯り 星二路
支配人金庫へ重い首をさせ たけを
支配人社長のミこでよく笑ひ 白樂子
支配人のつびきならぬ事をいひ 櫻ん坊
支配人ちこそり氣味に腰をかけ 千鳥
ほんやりご金庫に映る支配人 柳秀
支配人俺はつかりに用を言ひ 三浦生
支配人夜店の植木買ひかぶり 光路
もう歸る時計見てるる支配人 同
眼の上のこぶ支配人支配人 洛東絃
ラケットを握つて若い支配人 同

支配人だけの命を小さく持ち 鎌月
支配人グイグイ飲んで笑ふだけ 萬よし
人へらし支配人にも皺がふね 普天
支配人陰で何やら禮を云ひ 源坊
ソフアーで多用多用支配人 大夢子
支配人金庫に映る日の多し 聞路
支配人煙ご頭だけが見ゆ ひで

火鉢

駒井美の作選

もう子供歸る火鉢に餅をのせ

(佳)荒^た手^たを火鉢にもむも女親

快談に火鉢はつかれ又つかれ

考へのついた火箸はぐつさ差し

赤本の表紙股火の膝に反り

膝詰の咄し火鉢を横にやり

(佳)切炭のは^ま火鉢に春か立ち

謝り度い氣持火鉢へチトにじり

(佳)長火鉢外の嵐は知らぬ様

寒襷古火鉢一つを嘲笑ひ

桐火鉢歌留多の讀手はなれて來

火鉢から女將電話へ智恵をかし

火鉢から虚空つかんで立上り

桐炭のはざる火鉢に手を控へ

火鉢から見上ける時計進むだけ

下宿

朝陽選

太田朝陽共選

井上三郎

講義録下宿の窓へ寄つて讀み

出世して元の下宿へたづねて來

下宿から隣りの干した竿がみぬ

下宿屋へ探偵が來て一人減り

外國の下宿の味も覺て來

おもてから訪^は下宿は首を出し

(佳)下宿屋を阿彌陀^ら負^り使^出

くゞり戸が一寸あいてる股火鉢

(佳)幹事まだ火鉢の^な事^をきき

長火鉢もう風呂錢が残るだけ

(佳)健在かなさ^き青磁に炭を^ま

待合室火鉢へ患者みなだまり

火鉢へ丸くなつて伯父一寸來い

(佳)股火鉢を受付子ヌット立つ

店火鉢あみだの高で少しもめ

一廻り廻つて夜警察をつぎ

(佳)無造作に銀貨をくま長火鉢

圍体が宿の火鉢に盛り上り

火鉢から火鉢へ給仕火をくばり

(住)丹前で坐れば火鉢少^さなり

(佳)子の手を銀貨火鉢の中落^す

豆 蔓

柳 造

鎌 月

源 坊

町 二

突 坊

光 路

星 二

た け

侶 之 助

朱 唇 子

櫻 ん 坊

同

柳 秀

天 花

のほる

鮎 美

萬よし

同

同

晴 嵐

同

同

利 劍 坊

山 月

濁 水

聞 路

志 郎

のほる

三 笑

其 象

大 夢 子

千 代 二

三 日 坊

山 月

同

同

同

同

同

同

同

があります(二)酢の物に遊治郎(三)明治四十三年夏。

(一七) 前田 五 健

(一) 前田久太郎(久太郎云ふ名が野暮くさいのでいやだが親父から私の知らん間につけて呉れたので仕方がない、赤ン坊の時ニ理屈こねたらよかつたと思つて居ます。ナニ無理じや……さあ左様いふ文化時代に早くして貰ひたい)(二)五健(元は五剣でしたのが昨年の九月に改號しました。定紋の梅の劍は私の郷里(讃岐)の五剣山からでした)が劍を健に改めたのはある關係上秋山好古將軍から質實剛健、進取不倦ヲナ所より改めました)

(三) 球太郎(四) 松山市鮎屋町三四(五) 明治二十六年一月五日生れ(六) 伊豫鐵道電氣株式會社の電氣屋さん(七) 武者一人叱られて居る土用干(古句(八) 瘦せた芝雀……花柳式(九) 残念で力んで見た

釣、煙草、漫畫(一) 破れ鍋に續り蓋式であります(二) 格別ありません(三) 大正四五年頃だらふと思ひます、其の前は學校時代より俳句をやつて居ました。

(一七) 大久保 大 夢 子

(一) 大久保純(二) 大夢子(三) 桃源、冬

女(一) 昔も前投書熱に浮かされ幾何や三角の時間に歌や美文なを書いた時分用

角の時間に歌や美文なを書いた時分用

(佳)卒業へ下宿徹夜の灯が點り
 貸せる丈け貸と下宿屋狭う住み
 牛肉で下宿の友の騒がしい
 食うて寝て今日も下宿を後にま
 (佳)下宿炭籠豆皮プログラム
 逢ひたさをこらへ切下宿を出
 證人に下宿の亭主よび出され
 (佳)世帯持下宿の頃を戀しがり
 (佳)下宿にも櫻の便りやつても
 臺灣人泊めて下宿屋さびれてき
 下宿へは誰憚からぬ女文字
 此の頃は下宿になれて手をた
 下宿屋へ又今月も借が
 取り敢ず下宿へみんな預けさき
 學問をする氣下宿を探して居
 妹さ妹さ下宿へ三人目
 (佳)不意の客萬年床を捲き上
 三割は取れぬ豫算の下宿業
 國からも下宿へさく頼み狀
 (佳)墮落と一人下宿で晝を寢る
 眠れぬ夜前の下宿が八釜しい
 (軸)同姓に下宿の女將聞き直し
 丹膏の菊も淋しい下宿なり
 後家さ娘で下宿をはじめ
 宵寢して下宿汚い事を知り

鎌月 晴嵐 穂波 のほろ 鮎美 柳秀 櫻之坊 侶之助 たけを 星二路 光路 一葉 秋晴 突支坊 龜珍 たかね 失名 源坊 眺太郎 支郎 柳造 朝陽 穂波 三笑 其象

満中陰下宿の思案定まらず
 自炊する話下宿を悪く云ひ
 卒業へ下宿徹夜の灯がこもり
 貸せるだけ貸と下宿屋狭う住み
 留守勝な事が下宿の氣にかかり
 下宿屋も國の爲替をこもに待ち
 學成つて下宿を拂ふ麗かさ
 下宿賃来る人毎に尋ねられ
 問題の女下宿を訪ねて來
 下宿して親仁きてらで暮して
 下宿からかけた電話も疑はれ
 法科出を下宿は少し持て餘し
 下宿してゐて不甲斐ない事ば
 單調に厭いて下宿を替へたい氣
 下宿へはもう縫賃の要らぬ仲
 追ひ出されくても下宿あり
 (佳)雨の日の下宿に一人髭を判
 (佳)下宿屋へ類を集めた紺緋り
 獨り居て罪を重ねる下宿にて
 (佳)債券も買つて下宿でおさ
 出世して元の下宿へたつて來
 (佳)下宿から下宿原稿まだ賣
 壁を背に下宿の膝の淋し過ぎ
 脚氣だけ残して下宿晝さなり
 (佳)生きぬ仲下宿も廣い内

大夢子 山月 鎌月 晴嵐 利劍坊 繁松 彩秋 濁水 天花 銀燈 紫光 柳秀 籬楓 秋晴 突支坊 志郎 のほろ 櫻ん坊 山雨樓 同 萬よし 同 光路 同

ひたもの、故あつて筆を折つて以來無用
 (四)大阪市住吉區天王寺町二一三五(五)
 明治廿三年六月十九日生(六)へボ官吏
 (七)「冬が見ゆるが何も見當らず」莢豆
 (八)眼三頼の線の柔かそいして心のハツ
 キリした女(九)「いつも通る蓮の青い途
 を行く」(一〇)菊三朝顔作り、尺八、寫
 眞皆下手(一一)有(一二)脱ぎ放しの着
 物(一三)大正十四年十二月

(1916) 酒井 鎌月

(一)酒井義信(二)鎌月(三)由女三、宵園
 (四)神戸市布引町二丁目十五ノ三(五)明
 治四十二年六月十二日生(六)宇宙にさ迷
 ふ、無縁の衆生です(七)路郎、紋太、五
 葉、莢豆、馬行、松郎、云へば際限のな
 い位好きな句を作つて呉れる方が多いの
 です、自分のものさね(八)戀人の外にあ
 りません、一寸御紹介を申上ます、眼
 のパツチりとした一寸コケツト型の女な
 んです、もう死んだと思つてゐますがね
 映畫女優で例を上ひますミポーラネグリ
 ミ云ふ方です(九)今は「石轢子守が泣き
 に行くお寺」浮はれぬ底で佛を見つめて
 る「自業に笑へばよく轟く壁になり」以
 上本年作(十)活動、殊に外國物丈け、ス
 ポーツ、探偵小説の外國もの(十一)無し
 (十二)古いあたまた、眞似川柳家(十三)大
 正十四年四月頃より本當の川柳になつ
 たのは十五年から。

各地柳壇松郎編

萬よし川柳 卅二回 萬よし報

「朝」 文久、幽香、飯山 共選

投句百拾二名五百三十吟ノ中ヨリ採點

入賞者(九點)繁松(八點)三休、松郎(七點)

白蝶、山雨樓、其象(六點)京二、舟々、龜

五點

まんじりもせず許す氣の朝ま 白蝶

子を抱いて旗日の朝の門に立ち 三休

出勤の後ろ姿を疑はず 山雨樓

四點

入學の朝ハキ／＼と紺絆 青影子

朝さいふ氣分小鳥の餌をすり 京二

朝起きばよいなと思ふ二三日 羊司

作業服着る朝となり子と笑ひ

薄鳴りのきこゆる朝の水薬 豚二郎

三點

綻を見つけて寒い朝を起き 大夢子

一番で来た母親の健かさ 靜閑

登校をさせて半が聞けて来 紫朝

目醒しの鳴り切つてから起き上り 繁松

口銭を握り切らずに朝を出る 鮎美

妹にすまない朝を起きて来る 松郎

朝飯が出来て花嫁落ちつかず 勝太郎

早朝の客に正札疵を付け 松山子

朝飯の中へ極道戻つて来 柿郷

高張を残し火事場は黒う明け 光路

太陽と水と放れて朝が来る 句論子

拍手の響く家から朝となり 十九夜

出勤のあと忙し母となり 一路

氷室をすらせて朝を待ち詫びる 杏三

朝起す時は邪慳な母に見ぬ 繁松

朝の中風勝手の違ふ朝 京二

朝風に信心の米こぼれたり 松郎

馬鹿二人ゴチャリ朝の廓を出る 羊司

朝になり親になり拍手をうつ 龜珍

朝のごよめき林へこたまする 義信

せはしなない身で妾宅の朝を起き 興詩天

有明の月に向うて矢立出る 案山子

歡びの湧いて来さうな陽が昇り 三休

監督も朝の焚火に圓う寄り 山雨樓

養子から起きて毎朝門を掃き 松山子

赤手柄に似し椿咲く咲くよ朝 業平

寝過して朝の氣分になり切れず 其象

何思うてすまして御座る朝の顔 毒仙
 母親の聲から朝になつて来る のぼる
 朝戻り不孝な子にも母は待ち 三浦生
 (以下一點句ハ次號に發表)

本會報は抜句計九十八句を送られたので
 すが、二點一點の中の二句以上ある同一作者
 の分は各一句を採り、尙一點句の中で已に二
 點句以上に名の出てゐる作者の分は紙面の
 都合上省きました不悪。(松郎生)

竹馬居より (二月二日)
 同人報

群山川柳せんちや會の富田萬壽君來訪、初對
 面、一日夜より二日夕刻迄全く柳談に費やす
 在鮮川柳家の内情など大略を知るを得たり、
 多分今後は、せんちや會及群山日報柳壇のお
 世話をする事となるしべし、(省)

親方にはめられてゐる左り利き 嵩 蹊
 始から損を見込むでかかられる 同
 朝々をへんと納豆をみられる 省 二
 淺草の八丁で割前を拂ふ 同

奉悼川柳會 田邊 柳 陸 社
 二月七日夜當町大字上屋敷町木下水の子郎
 に同人の小集を催し寂しき夜を盡しき句に
 ぶけり終つて田邊第一尋常高等小學校々庭
 に於ける全町の送拜式に列した當夜の奉悼
 吟左の通り

御大裏春春ならぬ大八洲 茶利吉
 千代八十代までも祈る甲斐もなし 茶化素
 嗚呼悲しラヤオで拜す大行幸 利金太

寄る年を涙にもろい父さなり 芳香子
 後妻もう昨日の今日を體に結び 同
 運轉手ふりむきもせず先を訊き 同
 急停車して運轉手色もなし 同

鮎美居小集 (一月廿一日)

鮎美報

ハンカチ、寄附、美人、帽子

寺の寄附宗旨違ひさ斷られ 笹舟
 人混の中へ帽子を脱いで入り 案山子
 寄付帳をにじませたので摺り直し 鮎美
 闇をさぼく美人にあひぬ 同
 逢ひたさを帽子眼深に冠つて居 同
 寄附帳のその金高をみて見る 冷笑
 連れられて来たは美人の酌に酔ひ 同
 今流行る帽子の中に買へず居る 同
 寄附の事て又探めてゐる村さ村 眠聲
 本堂の寄附へ雑喉場の太い文字 同
 親切の絹ハンカチを割いて呉れ 同

句評

もう歸る網へ美人が揚つて來 案山子
 冷、笹、美人に限つてゐない。
 眠、この句は實際の境地さば思はれぬ、芝居
 だ、こしらへてゐる、矢張り美人にきまつ
 てゐぬ。
 鮎「美人になるにはどうすればよろしいか」
 「自殺すればなれます」といふやうな笑話
 があるからで、自殺美人、身投美人、等
 はあつても、自殺醜女といふのはない。

眠、けれどもごんな色の黒い男女でも、死れ
 ば「死蟻」さか云つて美しい色、即ち死人の
 特色が出て美しくなる。それで美人さ云
 ふのである。
 結局芝居の一場面さして、例へば「十六夜清
 心」の十六夜が、身投して白蓮の衣船の網
 に揚つた所等と見て落がつく。

糸屋町より (一月十六日夜)

(第二回)

於舟々居

宿題の智慧も出さうな眩枕 翠峯
 寒行の太鼓が、遠く風の音 同
 枕許の煙のたるい日曜日 同
 寢床から寒行の聲寒う聞く 舟々
 値切るには餘り火急な水枕 毒仙
 灯の消えた寒念佛の里心 同
 寒行の寒さ太鼓にまざらかし 流星
 枕邊に付切つてゐる子の病氣 三日坊
 枕にも矢張り一夜の世話になり 榮次郎
 生活の足しに出掛ける大師講 五六八
 寒行の聲さらつてくやうな風 寅太郎
 (第三回) (二月六日夜)

股チコロのたつた一目で後戻り 中井
 粟餅屋唄と三味まで客を呼び 翠見
 世の中を思ひくくに人心 翠峯
 双六はする子もなく壁に張り 五六八
 双六の前に皮肉な硯箱 流星
 振る股子に一々祈りかけてみる 榮二郎
 たゞ同じ音で水車は廻つてゐる 毒仙
 餅焼いて娘時代の話も出 同

夜通しと見れて荷車霜を置き 三日坊
 足一歩それが、そもく暗い道 同
 自用車に脂ぎつたが乗つてゐる 京那
 故郷から餅に團爐裏を思ひ出し 同
 雪解けにつれて轍も消えてゆく 同
 里ならで香りの高いよもぎ餅 同
 ストープで寒さを避る身にくらべ 同
 上りツマカ力を入れたて股子を振り 同
 五人みな生焼けた餅を喰ひ 同
 世の中をかんとたんに見る若夫婦 同
 久々に歸れば水車よく廻り 同
 双六を放れて一人病んでゐる 同
 餅搗に今日一日の若さである 同
 銀行のチラシが来ればさびしくて 同

電氣旬報柳壇

安井ひろし報

ごさ／＼と障子が鳴つて冬近し 錦禪坊
 あの人さきめた宵から眠られず 唾笑坊
 賞しはちやぶ台丈が部屋をしめ 古岐柳
 愛するさ云へハシカチ丸うなり 手腕坊
 初めての金齒で笑ふ許りなり 秋晴
 轉々々々妾戀など考へず ひろし
 ラクダの轡巻に咳 いる

募集句

回覽誌 創作 一句締切 三月末日
 川柳雑誌社事務所 松耶宛
 萬よし川柳 題先置五句 塚崎松郎選
 締切三月廿日、天地人へ粗賞呈
 大阪南區新戎橋南詰、庄屋よし宛
 電氣旬報 雑吟を募る(句數無制限)
 用紙ハガキ、臨時締切、發表月三回
 南區安堂寺橋通四ノ卅七安井 寛宛



編 輯 後 記

て居ます。

▲「川柳雜誌」は益々好評で、寄稿家諸氏の厚い御後援や、一般社會の有識者達よりも追々本社に對する期待を持たれ、殊に號を逢ふに伴いて愛讀者の増加すること等々、誠に嬉しい極みです。前號の如き殆んど賣切れの有様です。

▲一月二十八日に主幹路郎氏は、來阪中の漫畫家清水對岳坊、共戸佐行、宮尾しげをの諸氏と一夜の歡をつくられたさうです。

▲本號の表紙繪は、漫畫界の大家清水對岳坊氏の醉筆です。路郎氏の醉顔を寫されたものです。

▲二月十二日夕より鳴尾連日莊に於て、昭和に入つての初柳談會が催されました。丁度同人の右大臣が來阪されて居つたので、幸ひ參加されるなど中々の盛會でした。

▲二月十八日主幹路郎氏は有恒俱樂部(野村ビルディング七階)の午餐會席上で主幹の同窓、現大阪高商教授村木先生の紹介の下に川柳に就いてと題して趣味講演をされました。有恒俱樂部は大阪高商同窓會の有志によつて經營されてゐるだけに、大阪財界を背負つて立つ人々の參會者数十餘名で非常な盛會、しかも熱心に傾聴されたさうです。

▲故小川芳翠氏の追悼會が、二月十九日夕より瑞の坊に於て舍弟、小川舟人氏によつて盛大に營まれました。故人に縁故の深い私は當夜出席して感慨を深めました。いつか故人の深い思出などを書きたいと思つてゐます。

▲同人龜井花童子の柳誌「雪柳」が一月十五

日に創刊されました。四六版型で花童子好みといつた体裁のよい雜誌で句數滿載です。旺んに愛讀被句された。定價一部二十錢(送料共)函館市青柳町五〇渡島川柳社發行。尙「東北川柳」が福島縣白河町富士小路同會より「六文錢」が東京市外濠谷町元廣尾六六、柳眉會より「川柳の夜」が京城本町五の七六、連藤二葉里方京城川柳の夜事務所より、それ「發刊」されました。

▲生方敏郎氏社會評論雜誌「ゆもりすき」創刊號が愈々二月一日に發刊されました。御購讀をお勧め致します。一部五十錢東京市小石川區音羽町三丁目二社會評論雜誌「ゆもりすき」發行所振替東京七五四六五。

▲前號前田雀郎氏の「關西西鶴」中十三頁上段十九行目より下段四行目迄は「俳諧大矢數」の十七字十四字の句計十四吟を誤つて文章に組んでしまつたことを雀郎氏ならびに讀者へお詫び致します。尙「給仕へ癡まじもの」を大あくびの給仕へは給仕人の誤りです。

▲前號戸籍調安井ひろし氏中、安井實は「寛」物に好意は僕高敏の趣味は「踏」の各誤り

轉 居

▲小寺鳩甫氏は大阪府下池田室町二番丁へ
▲高橋月南氏は大連市龍川町一三七へ
▲青鷗南汀氏は大阪市西淀川區海老江一三三六へ
▲高橋綾朗氏は豐橋市東田實踐學校前へ
▲酒井鏗月氏は神戸市布引町二丁目一九一へ
▲房川素生氏は神戸市塚本通五丁目五五へ
▲井上凡平氏は大阪市天滿橋筋四丁目六七(各轉居されました。(一一二五・松那生)

▲一月以降風邪のために、惱まされてゐられた主幹路郎氏が殆んどよくなされたので、よるこんであるとき、間もなくその御家庭に引續いて四人のお子達が流感に罹られ、霞乃夫人までが御介抱に疲れて居られる有様です。その中を路郎氏は、本號の編輯やいろいろな事務に忙しくされて居られるので、本號當欄は私が代筆する事になりました。只今では他のお子達は、やゝ輕快の様ですが、あの有名なロンちゃんも、七八日ごろから十數日の間絶食の状態をつゞけられ、二三日は全く危険状態なので、昨日から看護婦や附添婦の人々やらで、病床に詰め切つて居られる有様です。私は今お子さん達の枕邊で路郎氏や霞乃さん等の御心痛をお察ししながら筆を執つ

投稿規定

- ▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記する(こ)。
- ▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」に封筒に朱記する(こ)。
- ▼締切は厳守されたし。
- ▼各地會報は清記の(こ)。
- ▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。
- ▼投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の(こ)。

募 集

第四卷第五號課題

三月十日締切

(各題二十句以内)

- ▼鳥籠 井上劍花坊選 塚崎松郎選
- ▼妻 關本雅幽共選 岩崎柳路共選
- ▼豆腐屋

第四卷第六號課題

四月十日締切

(各題二十句以内)

- ▼雨戸 蛭子省二選 相元紋太選
- ▼燒香 小西兔絲子 佐々木三福 共選
- ▼留學

每 號 募 集

- ▼近作柳傳(三十句以内) 麻生路郎選 塚崎松郎編
- ▼各地柳壇(會報) 章(評論研究吟漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所に宛に願ひます

價 定

- 一部 參拾錢(郵)
- 六部 壹圓六拾錢(郵)
- 十二部 參圓(共)

廣 告 料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼詩代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指承願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和二年二月廿五日印刷

昭和二年三月一日發行

第四卷第參號 (毎月一回一日發行)

- 編輯兼發行印刷人 兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地 麻生 幸二郎
- 發行所 兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地 川柳雜誌社
- 編輯大阪三二五二四番

大阪市港區八條通二丁目十二番地

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番

店書棚賣

- (大阪) 明文堂 公立社 柳屋 和正堂 三笠屋
- (東京) 仲見世 玉森堂 (神戸) 米田 後藤
- (金澤) 石井 (函館) 石塚 (廣島) 金星堂

讀書子に告ぐ

今のやうにあさから新刊が出るに新刊を一々讀破することは容易ではない。たゞへ新本を買つてもいよく讀むころになれば、もう古本で至極新しい本が出てゐる。こうなればわざ／＼新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新しい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新しい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にまつては、誠にありがたしい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば、幾冊か求めるうちに幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたなら決して損の無いことがわからう。

(路耶生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 番

清 酒

母親も白鶴ならこ一つ受け
 恩給も近く白鶴樽で据ゑ



灘 津 攝

釀 社 會 名 合 納 嘉



非常に愉快に聴ける

貝印内外

レコード

家庭の喜びはこのレコードから

一枚は一枚づゝ笑ひが漲る

レコードの花形!

太夫 竹本 津太夫
 三味線 鶴澤 叶
 ツレ 鶴澤 叶太郎
 義太夫 伊賀越道中双六 沼津の段

全十二枚の内五枚

が出来ます。これは又真に哀感にうたれるこ
 こに於て大變な人氣を呼んでゐます。是非御
 試聴を!



資會社 内外蓄音器商會

相變らず御引立

御後援の程願上げ候

浪界隨一の藝家

吉田一若

支配人 石田若泉

事務所 大阪市北區天滿花屋敷
電話北四一五九番